神奈川県内大学図書館
相互協力協議会

会報

平成23(2011)年11月1日　第46号
編集・発行　神奈川県内大学図書館
相互協力協議会
平成23年度事務局　〒240-8501 横浜市保土ケ谷区常盤台79-6
横浜国立大学附属図書館
電話 045（339）3203
http://www.kulc.net/
e-mail : kulc-office@kulc.net
印刷　共進印刷株式会社
電話 045（843）8544

◇平成23年度総会報告

平成23年度総会は、5月20日（金）午後1時30分から横浜国立大学附属図書館メディアホール（中央図書館1階）において開催されました。

総会議事後には講演会を設定し、慶應義塾大学理工学メディアセンター主任島田貴史氏より「電子学術書利用実験プロジェクトについて」と題してお話しいただきました。

島田氏にご寄稿いただいた講演内容と議事概要を以下に掲載いたします。

また、閉会後、横浜国立大学中央図書館の見学会が行われました。

◆講演：電子学術書利用実験プロジェクトについて

慶應義塾大学理工学メディアセンター
島田　貴史

1.　実験をはじめた理由

（当日は、冒頭に体験会を実施した後に発表を行っている）

今日初めて電子書籍に触れた、という方もおられると思います。どのようなご感想をお持ちでしょうか？意外に読めそうだ、という感想をお持ちの方も多いのではないでしょうか？話にならないレベルでないことがお分かりいただけると幸いです。まず始めに、本学が「電子学術書利用実験プロジェクト」を企画した理由についてお話します。

皆様は大学図書館に勤務されているので、電子ジャーナル（以下、EJ）についてご存知のことと思います。EJが学術情報の流れを変えた、というのが出発点と私たちは考えています。EJが登場してきた90年代末には「欲しいタイトルがない」「画面上では論文は読めない」という意見が多かったのですが、今日、EJのない大学図書館（特に研究機関を持つ大学）を想像するのが難しくなっています。したがって、雑誌の次は書

籍の電子化、と考えるのは難しくありません。

図1　利用できるタイトル数

- 雑誌タイトル数（カレントのみ）　P＝冊子 EJ＝電子

	洋雑誌（P）	和雑誌（P）	洋雑誌（EJ）	和雑誌（EJ）
平成16年度	8，678	10，895	22，197	―
平成21年度	5，959	10，837	37，972	約100

- 電子ブック（タイトル数）

	洋図書	和図書
平成16年度	1，967	0
平成21年度	18，275	約600

慶應義塾大学図書館で
利用できる電子資料の数

しかし、図1を見るとわかるように、登場から10年経った現在でも、日本語雑誌のEJ化が進んでいるとは言えません。「次は日本語雑誌も出てくるだろう」と待っていただけのEJへの反省から、今度は自分たちで動いてみようというが理由の一つ目です。もう一つの理由が教育環境の変化です。例えば、最近は授業をオンラインで配信することも珍しくありません。遠隔地での受講を前提とする授業に対して、教科書や教材を紙の形で届けるのには問題があります。また、複数の教科書が使用される授業や異なる課題図書が毎回指定される授業も増えてきました。大量の文献を使う授業で、学生に使用する全ての資料の購入を求めるのは無理がありますし、図書館の蔵書では、誰かが該当の資料を借り出してしまえば、他の受講者は返却されるまで利用できません。電子資料の持つ特性を活かしたサービスができないか、というのが二つ目の理由です。

そこで、電子書籍に関する実証実験の必要性を感じ、本プロジェクトが計画されました。本プロジェクトでは、1）本当に学生が電子書籍を必要とするのかを確認し、2）電子書籍に必要な技術の評価と、3）電子書籍の利用モデルやビジネス化の検討、という3つの目的を持って活動を行っています。

2．プロジェクトについて

図2　実験の体制（組織図）

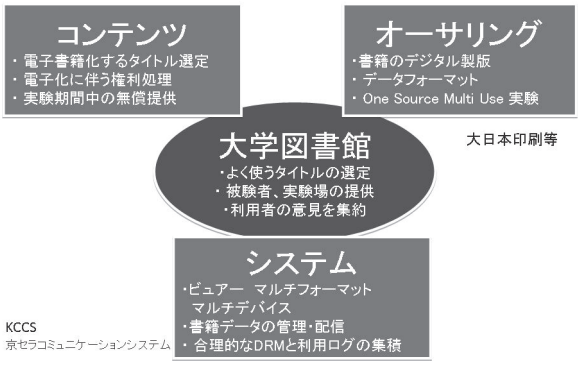
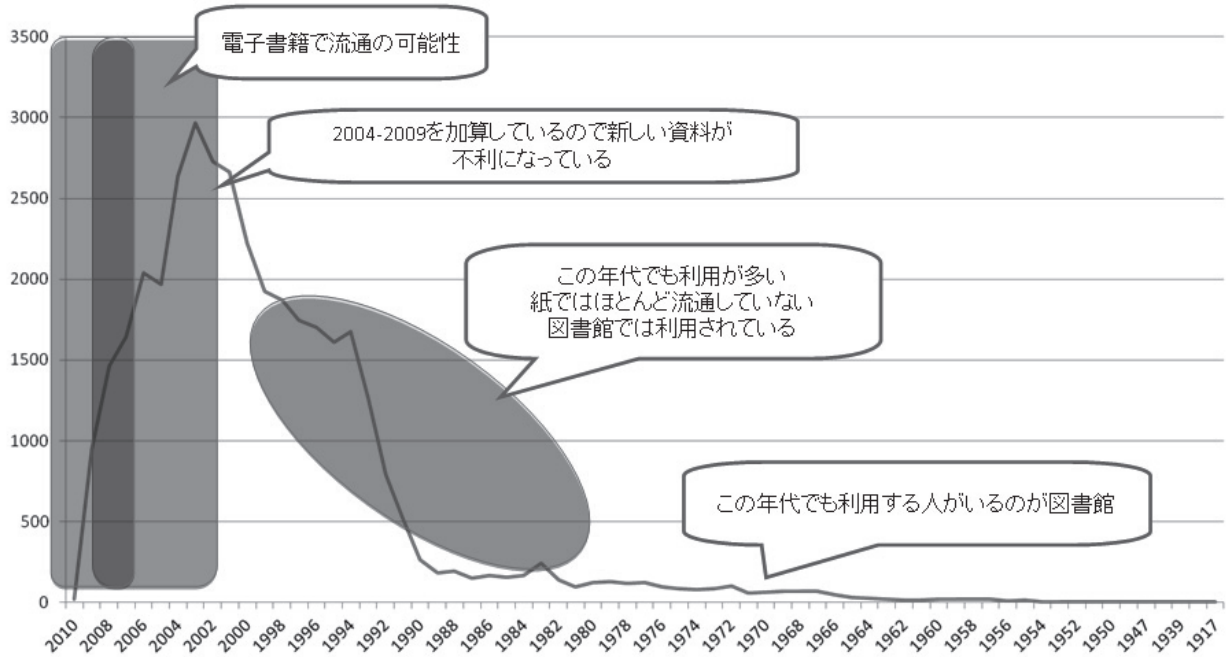


図2は、本プロジェクトの組織図です。本学（大学図書館）だけでなく、学術出版社（コンテンツ）や協力企業（オーサリング、システム）に加え、利用モニターとして、大学生も実験に参加しています。平成22年度から平成23年度までの2年間を活動期間とし、昨年一年間を第一期、平成23年度の上半期を第二期、下半期を第三期として、それぞれの課題に関する実験を行っています。各期の終了時には、モニター学生に対するアンケート調査とインタビュー調査を行い、利用者の「声」を出版社や協力企業にフィードバックしていきます。また、調査結果の一部は本プロジェクトサイト[*1]でも公開する予定です。

これまでのプロジェクト活動を通じて発見した2つのことについて報告します。プロジェクト開始後、最初に行ったのが「貸出記録の分析」でした。実験という制約から、何万冊もの書籍のデジタル化は難しいと考え、効率よく資料を提供するために「学内ではどのような本が使わ

図3　理工学部・出版年別の貸出タイトル数（大学図書館のロングテール）



慶應義塾大学理工学メディアセンター（図書館）の貸出記録から、2004～2009年度の6年間で20回以上の貸出があったタイトル数を出版年別でカウント。10年以上前（2000年以前）の資料も一定数利用されている。

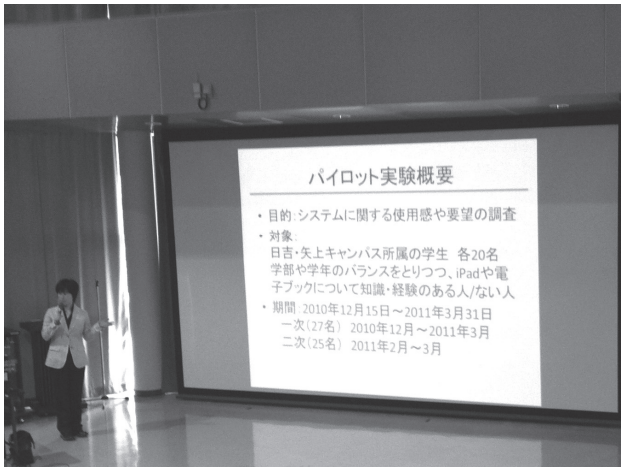
れているか？」を調べる必要がありました。図3が調査結果です。2004～2009年度の6年間の貸出記録の中から、貸出回数が20回以上あったタイトルを出版年別に並べています。調査をしてみると、大学図書館での資料の使われ方には「ロングテール」と言って良い傾向があることが分かりました。もっとも利用されるのは新しい本ですが、出版後20年以上経った資料でも一定数の利用があることが分かっています。化学、数学、物理といった自然科学や法律学などでその傾向が顕著でした。また、ロングテールで利用されている書籍の多くは、品切れで重版予定のない（いわゆる「絶版」）書籍も多く含まれており、実験で使用しても出版社の売上には影響が少ないと考えました。分析を進めることで、自分たちの図書館の利用傾向が客観的に把握できるだけでなく、ターゲットとする出版社と具体的なタイトルを絞り込むことができたのです。大学図書館での利用はロングテール向きである、というのが一つ目の発見です。

二つ目は、出版社を訪問した後に発見しました。出版社を訪問する前は、門前払いをされるのではないか、という半信半疑な状態でした。ところが、出版社を訪問し、意見交換を行ってゆくと、出版社も書籍の電子書籍について真剣に考えていることが分かりました。電子化が進まないのは出版社の意識が遅れているから、と図書館の業界人は考えがちですが、これは誤りです。ただし、出版社の方の多くは、冒頭で触れたような「大学図書館の変化」をご存知なく、また、大学図書館が「電子書籍を必要としているとは思わなかった」という状態でした。つまり、出版社も大学図書館も「電子書籍を試してみたい」という思いは持っていても、別々に行動をしていたのです。第二の発見は「相互理解の欠如」であり、「直接対話の重要性」です。この２つの発見により、実験のターゲットと進め方を確認することができたのです。

3. 学生モニターの反応

次に実験結果についてお話します。第一期実験を行ったのは、2010 年 12 月 15 日から 2011 年 3 月末でした。アンケート結果は実施できましたが、インタビュー調査は東日本大震災の影響で中止せざるを得ませんでした。第一期の調査では、構築した「システムの評価」と「電子書籍に対するイメージ調査」の 2 点を中心に調査を行いました。システムについては、安定性や解像度（本の読みやすさ）、検索機能や栞（しおり）機能、ページ送りについて評価を行っています。結果から言えば「まだまだ」という状態でした。特に「ページ送り」は、「紙のような」ページめくり感と、スマートフォンでお馴染の「タップ」が良いという意見に分かれています。また、実装していないコピー機能やメモ機能に対するリクエストも多く寄せられました。印刷については 2/3 のモニターが必要と考え、印刷単位としては、「該当ページのみ」「10 ページ程度」「章単位」という意見が多くなっています。「1 冊 3000 円の学術書を電子書籍で購入するならいくら？」という質問をしたところ、2/3 が半額以下の値段を回答しています。「データにお金は払えない」「他の電子書籍が紙の本より割安だから」という意見が多かった一方、1/3 の学生は定価前後の価格を挙げています。ただし、「(制限されている)コピー機能や印刷機能がある」「手書きで書込み機能がある」といった付加価値があることを条件に挙げています。

電子書籍のイメージでは、「電子書籍はウェブの一種である」というイメージを持っていることが判明しました。検索したい、必要な部分（だけ？）を編集して使いたい、好きな時に利用したい、電車の中や外出先で利用したい、といった記述から、電子書籍に求めているものが、彼らのウェブの利用法と重なっていることが分かりました。この点については、場面別の資料の利用法（例えば、授業の時はどんな本を使うか？）や本の購買基準調査などと関係させて調査を継続する必要性を感じています。また、今後（5 年後）の電子書籍の状況に関する予想では、まだ「紙の本」を中心としながらも、徐々に電子書籍が増える、増えて欲しいという意見が多くありました。



4. 今後について

ここ 1 年以内に紙の本が電子書籍に切り替わる、という状況にはまだありません。最大の理由は「読みたい本がない」からです。一方、読みたい本が揃ったら？と仮定してみると、図書館としては考えなければならない問題があります。例えば、OPAC はどうなるでしょうか？電子書籍はテキストデータがあるので検索が可能です。書誌事項だけでなく、本文からも検索できる「データ」がある場合、書誌データの価値はどうなるのでしょうか？また、貸出モデル自体の議論は必要ですが、期日で自動的にシステムが返却するようになると、貸出カウンターや配架作業、延滞本への督促といった業務はどうなるのでしょうか？こういった何故？を調べることが本実験の目的でもあります。

文部科学省・総務省・経済産業省による懇談会（いわゆる三省懇談会）や業界団体の会合で議論が盛んですが、実際に「動くシステムを使った実験」は意外に多くありません。また、それらの議論を見ていると、電子書籍の場合、個人購買を前提としたモデルが中心のように見えます。漫画や小説といったコンテンツの問題もありますが、図書館による利用モデルが出来ないかぎり、私たち図書館が電子書籍をサービス

することはできません。本実験では、動くモデルと集めた利用者の声を使って、電子書籍の団体利用モデルについての検討を行っていきたいと考えています。

*1　http://project.lib.keio.ac.jp/ebookp/

◆平成23年度総会議事報告

当日の出席は23館27名、委任状提出21校で、会則第9条第3項に則り総会は成立しました。

議事は次のとおり進められました。

1　平成22年度事業報告　承認
2　平成22度決算報告（下記参照）　承認
3　平成22年度会計監査報告　承認
4　平成23年度事業計画案
　諸会議、会報発行等、例年にならって活動を行うことが承認された。
5　平成23年度予算案（下記参照）　承認
6　神奈川県立外語短期大学図書館の脱会について　承認
7　多摩大学メディア&インフォメーション・センター湘南キャンパス図書館の加盟について　承認
8　その他
・会費納入依頼（【事務局報告】参照）
・保管期間を過ぎた資料の廃棄報告

【平成22年度決算】

＜収入の部＞

1　会費	225,000円
2　その他（銀行利息）	84円
前年度繰越金	427,543円
合計	652,627円

＜支出の部＞

1　会議費	52,452円
2　事務費	36,742円
3　印刷・製本費	88,725円
4　研究活動費	0円
5　予備費	0円
次年度繰越金	474,708円
合計	652,627円

【平成23年度予算】

＜収入の部＞

1　会費	225,000円
2　前年度繰越金	474,708円
合計	699,708円

＜支出の部＞

1　会議費	70,000円
2　事務費	100,000円
3　印刷・製本費	150,000円
4　研究活動費	60,000円
5　予備費	319,708円
合計	699,708円

以上

【事務局報告】

◎ 東北地方太平洋沖地震に関わる会員館の被災および運営状況について

このことについて、各会員館が必要かつ正確な情報を効率的に把握し、利用者サービスに資することができるよう、3月17日に会員館に情報の提供を依頼し、回答をもとに協議会のウェブサイトに会員館の被災状況および運営状況の一覧を掲載しました。（4月1日まで随時更新を実施）

突然の依頼にも拘らず、ご協力いただきまして、まことにありがとうございました。

◎ 調査の実施

- 名簿記載事項および相互利用マニュアルウェブ版記載事項確認調査
- 平成22年度共通閲覧証による相互利用統計調査

上記2件の調査について6月9日に会員館に依頼し、回答をもとに「神奈川県内大学図書館相互協力協議会会員館名簿（平成23年度）」および「同 共通閲覧証利用統計（平成22年度）」を作成し、7月29日に送付しました。また、「相互利用マニュアルウェブ版」については、8月11日に更新を行いました。記載事項の確認調査へのご協力、まことにありがとうございました。

◎ 平成23年度会費徴収報告

会費納入について5月20日の総会にて依頼し、10 月末日に全会員館からの入金を確認いたしました。

◎ 神奈川県内大学図書館相互協力協議会

ホームページ　http://www.kulc.net/

メーリングリスト

全会員館用：kulc@kulc.net

連絡館用　：kulc-r@kulc.net

※ 登録アドレス、名簿記載事項の変更は事務局までご連絡ください。

◎ 平成23年度実務担当者会開催について

下記の趣旨で開催いたします。

日　程：平成23年11月25日（金）

場　所：横浜国立大学附属図書館

テーマ：実務者のための問題解決法

・参加者ディスカッション

・各種取り組みの実践事例発表

1)「学生スタッフS-Circle（エスサークル）の活動」
慶應義塾大学理工学メディアセンター

2)「Moodleを利用した図書館ガイダンスの試み」
湘南工科大学附属図書館

展示・イベント等の企画、入館者数・貸出冊数の減少など、現場で抱えている問題をテーマとして、そのテーマ別にグループに分かれてディスカッションを行い、問題解決策を考えるトレーニングを行います。また、本年度は、加盟館における各種取り組みの実践事例発表の場も設け、情報を共有することにより、現場での業務改善や問題解決等のための手掛かりとしていきます。

別途メーリングリストにて、詳細な開催通知を行うとともに参加者を募集しています。

多数の皆様の参加をお待ちしています。